

登場人物

井上竜

飛田昇子

藍

真耳サ真藍

サーファー

耳年増

野次馬

まゆみ

松本さん

OPENING

どこかの街のどこかのビルとビルの間。

人々はそれぞれの方向へ急いで歩いている。

人ゴミの中、アスファルトにしゃがみこむ藍。

シャッターを切るように焼付けたシーンを繰り返す。

返し再生し続けている。

「ジーカシャ」

「ジーカシヤ」

「ジーカシヤ」

「ジーカシヤ」

「ジーカシヤ」

藍の頭蓋骨の裏側に映し出されているのは

七色に輝く波、そしてそれに手を伸ばそうとしている昇子。

藍 見つめ続けたあの瞬間。

思わず口に出してしまった言葉。

藍に一人の男が声をかけた。

その間も藍は再生を止めることはない。

竜 あの、どうかしましたか？ ちょっと大丈夫？

藍 あ……

竜 こんなところでしゃがみこんだら踏まれるよ。人通り結構あるんだから……あ、眼球、角膜、前房……あ、ごめんね。気にしないで、いつもの癖だから。どうも女の人の目を見るとつい昔の癖が……

藍 あ……（自分の頭の周りや目の前をつかむように手をハタハタ）

竜 えっ…もしかして俺のこと分かる？知ってる？

いやー、分かる人には分かるんだね。もう誰も覚えてないと思ってたのに、何かてれるなあ。そうなんですよ、昔よくテレビに出ていたあの記憶少年とは、なんと、実は、

藍 あれ、どこ、どこにいったの？

竜 僕なんですけど…

藍 どこにいるの？

竜 あの…

藍 いなくなった…

竜 何だ。てっきり俺のこと知ってるのかと思ったのに。はあ、つまらね。ちよっと、

藍 そうだった。…もういなくなっちゃったんだ。

竜 俺、もう行くからね…。

藍 頭蓋骨のうらっかわに映し出される記憶と呼ばれるほどあやふやなものではなく、

その時、昇子が七色の波に触れた。

昇子 ビリビリビリビリ…

藍 正確な8mmフィルムのようにカタカタと1mmのズレも無く、どれだけまぶたを押さえても鮮やかに再生

されるあの瞬間。私は……！

竜 大丈夫か？こいつ。

藍 だけどこんなにはっきり再生出来る。こんなに近くに見えるのに、これは本物じゃないものね。

竜 何？何、幻想見てるの？

藍 目の前で起こったあの瞬間は幻想じゃありません。

竜 え？

藍 幻想は頭の中で眼球から入ってくる外部の情報ではありません。私は焼付けたもの、ビルとビルの間から波が……

竜 波？

藍 キセキの波、を見た。

竜 分かった。分かったから落ち着いて。あのね、今10時すぎ。通勤ラッシュもいつもどおり。波なんて来なかったよ。

藍 10時すぎ？通勤ラッシュ？あれは昨日のこと？今日の朝？じゃあ私。……

竜 もしかして昨日の夜からずっとここに？

藍 ずっと？そうよ、ずっと思ってた。事実を鮮明に、事実を克明に。私は……

竜 俺、ついてないなあ。昨日だって1晩中待ってたのに誰も見に来てくれなかったし。徹夜あけで何でこ

んな変なのに声かけちゃったんだろ…。

藍 私は精巧なカメラ…なんかじゃない…

竜 まあ関係ないし、ほつところ。

藍 私の見たいものを見ればいい、そう言った。私の見たいもの？

竜 お大事にねえ。

藍 ビルとビルの上に押し寄せた七色に光るキセキの波。ビッグウエーブデイチケットを握り締めたあの瞬間。

竜 え？今、何て言った？あの、ちよつと！君もしかしてチケット買ってくれたの？ちよつと待って。俺だよ。俺が井上竜なんです。

けれど藍は人ごみにまぎれていく。

一場

藍を探すのに疲れた竜は携帯を取り出して。

竜 はあ、はあ、あの、はあ、はあ、…俺…。

まゆみ もしもし、何よ、慌てて。はあはあ言っば

かりだからイタズラ電話かと思ったじゃない。

竜　それがさあ、まゆみ聞いてくれよ。

まゆみ　せっかく久々の休みだから気晴らしに映画でも行こうと思ってたのに。何で竜のはあはあ聞かないよ。やいけないのよ。

竜　映画って一人で？

まゆみ　悪い？

竜　じゃあ電話じゃなくて会おうよ。

まゆみ　竜がまわりをチョロチョロしてたら、私、新しい男できないじゃない。

竜　あれ？まだできてないの？

まゆみ　仕事が忙しいのよ！

竜　忙しいって言ってもまゆみのところのクチコミ雑誌はほとんどカップリングパーティーしかのってないだろ。

まゆみ　いいじゃない。一番チケットが売れ行きいいんだから。

竜　それしか能がないのか！

まゆみ　あそう、そういうこと言っているの？もうビツグウェーブデイの情報のせてあげないわよ。

竜　今のうそ、忘れて。

まゆみ　私がいるからあんな訳の分かんない、しかもチ

ケットほとんど売れないようなイベント情報のせてあげたのに。ごめんね、能のない雑誌で。

竜 いやいや老若男女にとっては大変有意義な雑誌で
ございます。

まゆみ 調子いいんだから。じゃあね。

竜 ああ、まだ切るなよ。俺の話聞いてよ。

まゆみ 何？

竜 どうしてお前はいつもケンカごしなわけ？

まゆみ 違う。威勢がいいだけよ。で、何よ。

竜 今、ついさつき、俺のビッグウェーブデイチケットを買ってくれた女の子と会ったんだ。

まゆみ ええ？

竜 追いかけたけど見失って。もしかして昨日の俺を見てくれたのかな？キセキを見たって言った。やっぱり俺ってキセキの少年なんだよ。

まゆみ だけど会場には誰も来てなかったんでしよう？

竜 うん。見渡したけどノーゲスト。けど、影から見たたのかもな。はずかしがりやなんだよ、きつと。

まゆみ オタクっぽいかんじだった？

竜 それがかなりかわいい。目なんかクリつとしてて。ちよつと変わった子だったけど。

まゆみ 変わった？

竜 会話のキャッチボールなんて出来なかったよ。でも、今思うと興奮してたのかな……あ、もしかして俺を見て?!

まゆみ あんたって本当に調子にのりやすいんだから。

竜 でも、ビルとビルの間から何って言ってたっけ？七色のキセキの波を見たって言うんだけど、それはちよつと意味が分からなかったなあ。

まゆみ 本当にチケット買った子なの？そんなめずらしい子いるのかねえ。

竜 だってビッグウェーブデイチケットって言ったもん。

まゆみ ちよつと待って。えーと、今月の9月のチケットの売れ行きが、…あれ？3枚売れてる。

竜 えっ、？俺、そんな事聞いてないよ。

まゆみ 絶対誰も買わないと思ってたから、私はチェックなんてしなかったけど、本当に買った人いたんだ。

竜 な？そのうちの一人があの子だ。

まゆみ 何回も聞くけど、昨日の竜のイベント会場には人っ子一人、いなかったのよね？

竜 うん。

まゆみ 悪いけど昨日で最初で最後にしてちようだいね。そんな売れないイベント情報のせるだけ無駄だから。

竜 何で？3枚チケット売れてるじゃない。俺、来月もやろうと思ってるのに。

まゆみ 売れたけど見に来てくれなかったら意味ないでしょ？

竜 頼むよ。来月もお願いします。まゆみ協力して。

まゆみ だったら、もう少し詳しく情報のせないと何のイベントだか分からないわよ。

竜 「キセキを起こします。井上竜のビッグウェーブデイ」それだけで分かる人には分かると思うんだけど。まゆみ 会場の場所も「ビルとビルの間」って書くだけでいいって言ってもそこら中ビルとビルの間なんだから。

竜 だって俺が昔テレビで野外中継の時はいつも同じビルとビルの間だったから、ほら、3丁目の交差点、分かる人には分かるはず。

まゆみ 昔だったら、でしょ。いつも記憶少年の時のことばかり。

竜 あの時はすごかったな。町歩いてたらみんな俺のこと知ってるんだもん。きつとあの頃が俺の絶頂期。そう、最高潮。まさにのりにつてる真っ最中。そうだよ。あの時が俺の人生最大のビッグウェーブだったんだ。思い出しただけで興奮するよ。天才ちびっこ大

賞総ナメ。

竜・まゆみ スタジオ一面に人体一覧表が張り出されて、頭の方から名称を言っていくんだ。足の爪先まで言い終えた時のあの会場からの拍手と歓声。昧わったことのないヤツには分からない。

まゆみ 何十回も聞いたから覚えちゃったわよ。

竜 すごいねって。キセキだよ、キセキの記憶少年って、いつも言われていたのに、今じゃ…

まゆみ ハタチ過ぎればただの人。

竜 もう一回来ないかなあ…人生二回目のビッグウェーブ。

まゆみ ただの人じゃないじゃない。

竜 え？

まゆみ スタジオでのカンニング防止で身についちゃった癖、まだ治ってないんでしょ。「ズルしないように司会者のお姉さんの目をじっと見て言ってくださいーい」

竜 会社でも女の子の目はそらしながら喋らなくっちゃ思わず出るんだもん。前頭葉、後頭葉、頭蓋骨…

まゆみ そんな癖だけが未練たらしく残ってるなんて虚しいじゃない。もう忘れなさいよ。

竜 あいかわらず冷たいね。

まゆみ 来月もノーゲストなら本当にやめなさいよ。一

応協力はしてあげるから。

竜 まゆみ、あのさ。

まゆみ いや。

竜 まだ何にも言っていないよ。

まゆみ どうせもう一回やり直そうとか言うんでしょ。

絶対に嫌だ。

竜 そんなに嫌がらなくても。

まゆみ Hの時に目隠しが必需品の男なんてもうコリゴリ

竜 しかたないだろ癖がでちゃうんだから。

まゆみ さー、こんな話はやーめたつと。

救急車が竜の傍を通り過ぎる。

まゆみ 今、外なの？

竜 うん。救急車が通って行った。

まゆみ 何かあった？

竜 いや、知らない。

慌ただしく飛び交う声。

「急患、はいりました」

「柳町救急です」

「時間は午前10時15分」

「血圧」

「脈拍」

「意識レベルは？」

「大丈夫ですか？大丈夫ですか？」

「反応はありません」

「輸血の用意」

「血液型は？」

「家族に連絡を」

「身元、年齢は分かりません」

松本 9月2日。

「路上で発見」

「高校生くらいの…」

松本 はじめて松本さんとあいました。

「吐血が酷く、内臓破裂の可能性あり」

松本 びょういんのろうかは、

「腹部が握り潰されています」

松本 バタバタしていました。

「アルコール反応なし」

「急いで下さい」

松本 いそいで下さい、というこえにつられて私はは

やくちに言いました。はじめまして、そして「せい

つくんれんセンターの松本よくむかえにきたわく」と

口をゆがめて松本さんは言いました。9月3日。とて

もはれたそら……

昇子 何見てるの？

松本 ん？あなたの日記よ。

昇子 ちゃんと言われた通り毎日書いてるよ。ここに来
てから、えーと2週間毎日。

松本 偉いわねえ。けど、もう少し漢字使いなさいよ。

昇子 だって分かんないんだもん。はい、これ。

松本 ああ、出来た？

昇子 うん。

松本 えーとつ、何これ。間違いばかり。こんなのは
ダメ。はい、やり直し。

昇子 また？

松本 昨日も、一昨日も、この問題したじゃない。3回
目なんだからいい加減に覚えなさいよ。

昇子 だって…

松本 じゃ、おさらいするからね。いいね、よく聞くの
よ。

電車の乗り方。地下鉄で一区间先の駅に行こうと思っ
ます。はい、どうするの？

昇子 えーとっ…

松本 最初からつまってどうすんの。まず切符を買わな
いといけないでしょ。

昇子 ああ、そうか。

松本 一区间だから200円、それから改札を通る。こ
こポイントよ。その時、切符を取り忘れないこと。電
車が来たら黄色い線の後ろで待つ。ドアが開いたら乗
って、着いたら降りて、最後は改札をもう一回通って、
はい、ここもポイントよ。その時切符は？

昇子 出てこないからそのまま通りすぎていい。

松本 ……やれば出来るじゃない。

昇子 ありがとう。

松本 じゃ次はタクシーの止め方。

昇子 はい。

松本 あんたさあ、元気よね。

昇子 うん。まつもっさん、何か疲れてるね。

松本 まつもと。ちっさな「つ」はいらないの。

私はいつものこと。あんたさあ。

昇子 うん。

松本 普通もつと落ち込んだりしない？

昇子 普通はそうなの？

松本 名前、年齢、身元不明。生活レベルまでの記憶の混乱、喪失。出されている検索願いと一致せず…

落ち込まない方が不思議なくらい。

昇子 まつもっさん、そんなことまで調べてくれるの？

松本 病院からあなたの資料もらってるからね。

昇子 連繋プレーだね。ねえ、どうして私は病院じゃなくってここにいろの？

松本 9月2日の明け方にフラフラして補導されたこと覚えてる？

昇子 うん。

松本 そのまま病院に連れていかれたことは？

昇子 知ってるよ。

松本 診察室で。分かんない、を連発してたでしょ。

昇子 正直に答えました。

松本 そういうお金にならない患者はどしどしこっちに

送られてくるのよ。記憶の混乱だけで体には支障ないんだから。

昇子 そうか、私お金持ってないもんね。

松本 普通はね病院とか刑務所とか、長い間一人で生活をしてなかった人が、最終的にこの生活訓練センターに流れてくるの。

昇子 他の人はみんな落ち込んでるの？

松本 それはいろいろね。でもあんたみたいなケースで、ここまであつげらんとしてるのはめずらしい…スト

ップー

昇子 何？

松本 くつ。右左反対。

昇子 ああ！

松本 気にならない、ねえ気にならないの？気持ち悪いでしょうがっ。”パジャマでおしやま” 見てる気分よ。

昇子 大丈夫。明日からちゃんと履くから。ねえ、さつき

松本 何？

昇子 さつき、落ち込まない？って聞いたけど、ほんとにね、私落ち込んでないの。だって「私」だって分かる資料が何もないから。

松本 この病院の資料は？

昇子 それがどうして私だって分かるの？

松本 あんた理屈こねるわね。

昇子 逆に何も覚えてないから、何も手がかりがないから、こんなに元気なのかもしれない。

松本 え？

昇子 だってちよつとでも、ほんのちよつとでも頭のすみっこで覚えていたりしたら、その方がよけいに悲しくなるような気がする。

松本 どこにも帰る場所がないのよ。

昇子 だったら反対にどこにだって行けるよね。

松本 分かった。

昇子 何？

松本 あんた若いわね。

昇子 たぶんまつもっさんよりかは。

松本 それは余計。

窓の外から聞こえてくる騒がしい若い声。

昇子 何？あの声。

松本 もう4時か。近くの学校からよ。

昇子 今日は何か特別な日なの？

松本 別に。騒いでるのはいつものことよ。

松本、声のする方へ目を向けた。

そのざわめきの中では：

耳年増 副会長―。情報、情報、New情報。

サーファー またクチコミ雑誌？私、もうカップリングパー

ティーには行かないわよ。ロクなのいなかったし。

耳年増 違うの。これ見て。

サーファー 「キセキを起こします。井上竜のビッグウ

ェーブデイ」？何よ、これ。もしかしてあんたキセキ

なんて信じてるの？会長に知れたらバカにされるわよ。

隠しておきなさい。

耳年増 その横に読者からのクチコミコーナーがあるで

しょ。何だかまんざらウソでもないみたいよ。結構ウ

ワサになってるの。

サーファー 匿名希望さん。「私はこの前ビルとビルの間

で眩く女の子を見ました。しきりにビッグウェーブデ

イチケットと言っていたのですが、クチコミ雑誌にの

っている、この訳の分からないイベントのことなんで

しょうか？女の子が眩いていたことはだいたいこんな

ことでした」

サーファー、耳年増、雑誌を覗き込んだ。

サ・耳・藍 ビッグウェーブデイチケットを握り締めて。

藍 ジーカシヤ。ジーカシヤ。ジーカシヤ。キセキが起

きたらいつぱい焼付けよう。キセキが見れるまで

絶対に帰らないもんね。でも開幕時間7時なのにもう

1時間も過ぎてる…。何にも起こらなかったら、どう

しよう。また見たくも無い風景とか映像ばかり見な

きゃいけなくなっちゃう。私が見たいのはそんなんじ

やなくて…

「ジーカシヤ」というポラロイドカメラのシャッターを

切る音。

藍 その時カメラの音と同時に男の子が話しかけてき
ました。

真 ザーと待ってるけど何にも起こんないねえ。もし
かして目に見えないだけで、もうキセキ起こったのか
な？

藍 そう言って撮った写真を私に見せて、

真 ネコ。かわいいでしょ。

藍 覗き込んで見ようとした私の目の前でその写真を

グシヤリ。

真 あー、やっぱりまだだ。あ、気にしないで。

藍 これは何かのまじないなのか、考え込んでる私を見て、何かに気付いたようでした。

真 あのさ、もしかしてテレビとかに出たことある？

藍 ほらね、やっぱりそう来たか。うんざりした気持ちで直観像素質者なんです、と答えた。

真 思い出した。カメラちゃんだ。ほら地下鉄のひつたくりのポスターになってた。

藍 「私、見てましたよ」というキャッチコピー。

真 そう、それ。カメラちゃんもチケット買ったの？

藍 キセキを起こすっていうのにひかれて、と私は少し笑った。

真 信じてる？

藍 少し答えにつまる。見たいと私は思った、けど本当に起こるかどうか。

昇子 起こるよ。起こらなきゃ私困るもん。

藍 どこから声が？よく見ると縮こまって座り込んでこちらに背を向けた小さな女の子。

真 あの、あなたもチケット買ったんですよね？

藍 声をかけるとゆっくり振り向いた。彼女には目が

無かった。

藍・真 ……。

藍 正確には紺色の布で両目を覆っていた。訂正を一つ。小さい女の子ではなく、小学生の低学年？

真 あの、その目……

昇子 気にしないで。いつもこうだから。

藍 いや、やっぱり高学年？微妙だわ。いくつなの？

と聞いてみると、

昇子 17歳みたいだけど、私は5年目なの。

藍 だから何歳なのよ？

昇子 ねえ、ジーカシャって何してたの？さっき言ってたでしょ？

藍 女の子の方は私のことを知らないらしい。私、テレビにも出てるのに。けど少しホツとした。

真 知らないの？見たものをいつでも頭の中でバーツと思い出せるんだよ。

藍 詳しく説明すると、B型直観像。過去に経験したことが意識的に鮮明に再生され、またその時の感情、意思、思考なども再生される。

真 顔、洗う時もしたまま？

昇子 もしかしてバカにしてる？

藍 二人は全く聞いていない。

真　ごめん。難しくってさ。あ、でも再生されるって
どんなふうになんか？

藍　ここ、頭蓋骨のうらつかわ、後頭部あたりに広がるの。だけど再生するのはいつもどうでもいいことば
っかり。私はやさしく頭をなでた。

真　そうか、カメラちゃんは一回キセキ見たら何度だ
って頭の中で見れるんだもんな。リアルタイムで。直
観像って便利。

藍　テレビの番組で別に見たくないもの見なくちゃい
けない。再生される内容もたくさんある。けど私が見
たいと思うものは何もないの。本当に精巧なカメラに
なっていくさそう。だけど……言いかけた私の言葉を押
しのけて女の子が言った。

昇子　だけどキセキは見たいと思ったからチケット買っ
たの？

藍　そう。私が初めて見たいと感じたこと。あなたは
どうして？と女の子に聞いてみると、

昇子　話せば長くなるわ。

藍　私は少し困った。男の子の方に話をすりかえた。

真　ナイショ。

藍　一言で終わった。

真　でもインチキかもしれないし。井上竜にぼったく

られたかもな。

昇子 だけでもうこれしか方法は無いのよ、私。だから待ってみなくちや。

藍 偶然、とても偶然に私達はビルとビルの間で、出会った。そしてキセキが起こるまでの間、待ち続けた。

クチコミ雑誌を読んでいたまゆみは竜を呼び止めた。

まゆみ 竜。ちょっと話があるんだけど。

竜 何だよ。チケットは前日だろ。今、全然売れてなくても前日まで待てよ。1枚でも売れたら俺はその人の為に人体一覧を言うよ。

まゆみ 違うのよ。

竜 そんなに今すぐやめさせようとしなくてくれってば。末永くあたたかい目でき、

まゆみ 売れてるの。

竜 へ？

まゆみ 全然売れてるの。

竜 日本語おかしいぞ、お前。

まゆみ 私も驚いて何回も見直したんだけど、今日の段階で売り上げベスト10の中に入ってるのよ。

竜　　ということは？

まゆみ　　おかしいでしょう!?

竜　　失礼だな。みんなやっと思ひ出したんだよ。

　　ほら、このクチコミ雑誌にのってるこれはもしかして

　　あの井上竜さん？

　　さっそく見にいかなくちや

　　キヤー

　　ってなもんだよ。はあー、やっとなあの拍手と歓声かも

　　う1回聞けるんだなあ。まゆみ、これも半分はお前の

　　おかげだよ。ありがとう。

まゆみ　　おかしいことがもうひとつ。

竜　　俺の言うこと聞ってる？

まゆみ　　このページ。

竜　　何だよ。

まゆみ　　読者からのイベントに関する感想とか意見とか
情報を交換するページなの。ここ見て。

竜　　えー「僕も見ました。ビルとビルの間でつぶやく

カメラちゃん」何だよ、これ？「情報あつたら教えて

下さい」「チケット譲って下さい」

まゆみ　　竜のチケットを買ってキセキを見たつて言う子
がいろんなビルとビルの間でそのことを話してるんだ
つて。うちは週間を出してんじゃない？今週号はその

ことでいっぱい。ウソか本当か分からないけどね。

竜　もしかして、ほら、先月のイベントの次の日にチケットを買った女の子に会ったって言っただろ？

まゆみ　うん。

竜　その子が宣伝してくれてるのかも。よし、今月のビッグウェーブデイがんばらなきゃ。10月1日まであと1週間かあ。もっとチケット売れるといいなあ。

まゆみ　たしかにこの子のおかげでチケットが売れたんだと思うわ。カメラちゃんの言うことだからみんなもしかしたらって思うのね、たぶん。

竜　カメラちゃん？

まゆみ　やだ、知らないの？

竜　うん。

まゆみ　その先週号の読者のページ見たら分かるわよ。

竜　ふーん。

まゆみ　ねえ、だけどおかしいと思わない？

竜　何が？

まゆみ　だって会場に誰もいなかったんでしょ？その子、何を見てキセキと思ったのかな？そこまで情報にのってないの。

竜　だから影から俺のこと見てたんだって、きつと。

今週号ってこっちか？えーと「私か聞いたうわさでは

……」

竜とまゆみが去るのと入れ替わりに高校生達がやってくる。

野次馬 「私か聞いたうわきでは……」ククク♪とうとうこの日がやってきたぜーちよつとごめん。俺、今日急ぐからあと頼む。バイバイ。

耳年増 生徒会長。どこいくの？

野次馬 だからごめんってば。

耳年増 ごめんじゃないわよ。会長が先に帰ったら話の前に進まないじゃない。今日の議題、最近流行っているドレッドヘア認定について。全校生徒の2／3の署名もらってますけど。

次馬 どーでもいいよ、そんなの。とにかく今日は本当にマジで急ぐから。適当に何か書いとけよ。お前、書記なんだから。

耳年増 私に押し付けてどこ行くの？

野次馬 書記、お前には関係ないだろ。

サーファー 波ね。

耳年増 副会長。

サーファー キセキの波、見に行くのね。

野次馬 いや、違うよ。

サーファー 私達に今日の議題を押し付けて。

野次馬 副会長にそんなふうに言われると、弱いんだなあ。

だけど今日はもう帰る。ごめんね。

サーファー ちょっと書記、書記。

耳年増 はい。何でしょ。

サーファー 会長はあんなにバカにしていたビッグウェーブデイに行くそうよ。

耳年増 ええつまさか！

サーファー あんなものチケット買って見に行くようなヤ

ツはけしからんと怒っていたのに。

耳年増 うわさではチケットを買った生徒を丸ボウズに

したとか。

サーファー なのに、自分は見に行くそうよ。「俺は絶対にイベント会社の策略にははまらん」と言っていたのに。

耳年増 私、会長を信じて今だに一度もチケットを買ったことないのに。

サーファー 裏切りね。

野次馬 そんなおおげさに言わなくても。

サーファー 会長、私達今日で解散しましょ。書記、書いておいて。

耳年増 はい。決裂の理由はどうしましょう。

サーファー いいこと、間違っても性格の不一致なんて公にしちゃいけないのよ。

野次馬 副会長。

サーファー やだ。うそよ。急用なの？

野次馬 うん？うん、まあね。そう急用。

耳年増 本当に？

サーファー 書記、会長がビッグウェーブデイなんて行くはずないでしょ、ね？

野次馬 うん、そうだよ。

耳年増 でも私一回くらい：

野次馬 バカーいいか、流行ってるからってホイホイのせられてチケット買ったら、その金はどこの誰とも知らない奴の懐に入るんだぞ。

耳年増 井上竜さんよ。

野次馬 詳しいな。

耳年増 情報だけわね。

野次馬 「情報だけわね。」あー情けない。流行に流される部下ばかりだ。

サーファー あら、会長。カバンからクチコミ雑誌がはみ出てるわよ。

野次馬 これは、カップリングパーティーに行こうと思

って買っただけ。

耳年増 見せて見せて。ビッグウェーブデイのことで
てるでしょ。

サーファー あらあら、読者の情報のコーナーはビッグウ
ェーブのことばかりじゃない。

耳年増 会長、行くならできるだけ情報集めないと。

野次馬 やっぱり、カメラちゃんが話す中にキセキの波
を見る為のヒントがあるってウワサはマジ？

サーファー そりゃみんながみんな見れるってわけじゃな
いでしょ。キセキなんだから。

野次馬 じゃ、今までの情報がのってるクチコミ雑誌を
集めないとな。

サーファー 大丈夫。書記がほとんど持ってるから。

耳年増 でも最近のエセ情報が出回ってるんで惑わされ
ないようにしないと。

サーファー そう言えばエセカメラちゃんっていうのも出
てるらしいわよ。

野次馬 ……、いや、俺行かないし……。

サーファー そうよね。会長は行かないわよね。

野次馬 でも情報くらい見てみようかな。時代の流れ
を把握しておかないと、会長として。

サーファー じゃ、副会長として。

耳年増 書記として。

そして一斉に雑誌をのぞきこんだ。

野・サ・耳 情報その1「ビッグウェブ同盟」

藍 ねえ、このままもう少し待つのか？もう10時すぎ。

真 どうしようかな。キセキが起こる気配すら無いもんな。ま、ウソに決まってるんだらうけど。

藍 あくあ。

真 あくあ。

藍・真 信じた私僕がバカだったかなあ。

昇子 うるさい。

藍・真 ええ？

昇子 暗いムードやめてよ。しんきくさい。私、まわりでゴチャゴチャ言われるの嫌なの。ねえ、同盟組まない？ビッグウェブデイ同盟。

真 はあ…同盟ねえ。

昇子 ねえねえ。

藍 それって何をする同盟なの？

昇子 疑うような行動とか、言葉とかを言っちゃダメなの。

真 もしやっちゃったら。

昇子 罰ゲーム。

真 期限は？

昇子 明日。朝一番まで。ねえ、そうしよう。

藍 そんなことしてキセキが来ればいいんだけど。

昇子 P i (笛) はい。あなた罰ゲーム。

真 もう始まつてるの？スタートくらい言えよ。

昇子 はい。じゃあ、スタート。

藍 あ！

昇子 何？

藍 ううん。いつものクセで再生しそうになっちゃっ

た。スタートの声で再生して、みんなに伝えて、スト

ップの声でやめる。

真 ほとんど職業病だな。

藍 キセキが起こらないと本当に精巧なただのカメラ

になっちゃいそう。

昇子 P i はい罰ゲーム。これつけて。(昔あった番組

ミドレミファアドンミのあのバッテンのついたマスクを渡す)

真 あのさあ。

昇子 P i 罰ゲーム。

真 はやすぎるよ。

昇子 だって声が疑ってた。腕立て10回。

真 疑ってないよ。けどさ、

昇子 P i

真 雑誌よく見たら内容のつてないし、

昇子 P i

真 だいたい場所はここであってんのかな？

昇子 P i

真 そうだよ。第一、このチケットのモギリはどうなるんだろ？ずっと持ってるから切り取り線の半分くらい切れてきてんの。気になるから全部取りたくなるのね。でもしたらこれ、無効ってことになるじゃない。

昇子 P I腕立て50回ね。ほら、早く。

真 何でお前が判定してるの？

昇子 だって私は信じてるんだもん。

雑誌を一度閉じる高校生たち。

サーファー やっぱ信じなきゃだめみたいよ。それから

同盟組んでおけってことかしら？

野次馬 信じる、同盟。

サーファー ちよっと何メモってんのよ。

耳年増 会長、やっぱ行く気なの？

野次馬 かーえろっと。

サーファー 情報その2、…あら？気になる？

野次馬 いいや。

サーファー 情報その2「3番目の昇子」

再び雑誌をめくった。

藍 え？それがあなたの名前？

昇子 そう。1番目も2番目の昇子も消えていなくなつたから。13歳からは3番目の私になったの。だから13、14、15、16、17、私はまだ5年しか生きてないから、分かんないこといっぱい。ここに来るのに初めて電車に乗ったけど、いじわるされて通してもらえなかった。ピコンピコンうるさいの。

真 お前、ウソつくなよ。

昇子 ウソじゃないもん。

真 そんな作り話、誰が信じるかよ。

昇子 本当のことだよ。

真 証拠は？

昇子 証拠？証拠は…えっと。

真 ほらな、証拠ないんだ。やっぱりウソなんだ。

藍 あー、やだやだ。まるつきり子供。

昇子 証拠は、これ。

藍 え？その目隠し？

真 どうしてそれが3番目の昇子の証拠になるわけ？

昇子 確かねえ、はしっこに書いてあるはずよ。

真 あ、3番目の昇子。

昇子 ね？

真 こんな証拠になるか。

藍 目、見えないから隠してるんじゃないの？

昇子 ちゃんと見えるよ、たぶん。

真 わー、見えるくせに隠してるなんてエロチック。

こいつへんだよ。

昇子 でもはずしたこと無いから分からないの。

藍 どうして隠してるの？このビッグウェーブデイと

もしかして関係ある？

昇子 だから消えちゃうの。

真 え？何が？何が？ねえ、何が？

昇子 この人うるさい。

藍 しっ！

真 はい。

昇子 この目隠しをはずすと私は消えちゃうの。2番目

の昇子は13歳の時にはずしちやったみたい。だから2

番目の昇子は消えて、次に3番目の昇子が生まれたの。

藍 消えるって？

昇子 忘れてしまうことだと思うけど、でも消えるって

いう方があってる。2番目は跡形も無く消えてなくな
った。

真 じゃ13歳までのことは？

昇子 全然。だって13歳までは私じゃないんだから。

真 本当に？マジで？

昇子 だからみんな区別して呼ぶの。1番目、2番目。

3番目って。でもね…

藍 でも？

昇子 いつかは3番目も消えて、4番目の昇子が生まれ
るの。そしたら私が2番目を覚えてないように3番目
のことなんて何も覚えてないよ。

藍 と、いうことは、あなたはいなくなるってことよね。

真 本当に？マジで？

昇子 私はあと何年この目隠しに耐えられるんだろう。

藍 5年間耐えてきたのよね。

昇子 実はもう限界。今ここではずしたら。

藍真 ああ…！

昇子 赤ちゃんになっちゃってしまおうでしゅー

真 本当に？マジで？

昇子 だってそう言われたもん。

真 だったらこんなとこにいないで病院行け。な？

藍 そうよお。

昇子 いきなり子供あつかいするな。

藍・真 だって5歳なんでしょだろ。

昇子 病院だつて行ったけどいつも言われることは同じ。

藍 何て？

昇子 忘れられないことをひとつでいいから作りなさい。

だからキセキを見たら絶対忘れないでしょう？体のど

こかすみっこでいいから覚えておくの。3番目の昇子

がいたつて。そしたらきつと消えてなくなったりしな

いと思うから。だから今日はここに来たの。

雑誌に没頭し始めた高校生たち。

情報を頼りにその場に居合わせたような気にな
つてくる。

野次馬 情報その3「キセキの波」

耳年増 私はあたりを見渡した。どこからどんなキセキ

が起こるのか。やっぱり井上竜さんが何かしてくれる

のかな？

野次馬 病気なおしたり、手から金銀出したりってこと？

耳年増 でもそれじゃサイババよね。

野次馬 だったらもつと有名だろうし。

耳年増 その時3番目の昇子はニヤツと笑った。

サーファー 違うよ。

野次馬 何が？

サーファー 井上竜って人じゃないのよ。だってキセキを起こすのは神様の仕事じゃない。

野次馬 さすが人生5年目のお子様の考えだな。

耳年増 じゃあ神様が来るの？あきれたように言うとおっぺたを膨らませた。

サーファー 違うよ。だってビッグウェーブデイ、直訳、波の日なんでしょ？きっと波の名前なのよ。キセキの

波の名前。

耳年増 (真のアゴ)アゴがはずれるほど驚いている。

私はとっさに支えた。だけどふと思った。ハリケーンにだって名前つけるんだから一理あるかも。

サーファー うそみたいな話を信じた人にだけやってくるの。

野次馬 いいですか？波とは海の水のことです。海って分かりますか？

サーファー バカにして。

野次馬 海水がこんなビルとビルの間に来るの？

サーファー 大丈夫。ちゃんと根拠があるの。

耳年増 自信満々。腰に手を当ててアピールした。

高校生たちはどんどん没頭していく。

昇子 ここに来た時からずっと聞こえるの。

昇子以外 何が？

昇子 波の音。ザーザーって。ほら、目をつむってよく

聞いて。ザーザザー…。ほら段々大きくなってる。

藍 ゆっくりまぶたを閉じた。

昇子 波っていつも海水とは限らないかもよ。

藍 どうしてだろ？こんなうそみたいなバカげた話に

聞き入ってしまう。

昇子 きっとキセキの波は七色ですっごくキレイなの。

藍 ビルとビルの中で、奇妙な空間と関係がそうさせ

たのかもしれない。

昇子 その波に触れた時にキセキは起こるんだよ。

藍 キセキを欲しがる私達だから信じてしまうんだろ

うか。

昇子 ほら、波の音。

野次馬 うそくせ！

それでも止まらずに没頭はひたすら続く。

真 波の音、キセキの波？

昇子 ねえ、手、出してみて。ほら手のひらに何か当たるの。冷たくて気持ちいい。これ、もしかして波？そ
うだよ。波が来てるんじゃない。キセキの波。

藍・高校生 その瞬間。

勢いよく風がビルとビルの間を通りぬけた。

昇子 ほら、波だ。

藍・高校生 けれどそこには何も見えない。ただ目を閉じれば体にまとわりつく感覚。これは何？もしかしたら
本当に、

真 もしかしたら本当に：

藍・高校生 私の目が見たもの。カバンをひっくり返すと
ばらまかれたたくさんの写真。

真 キセキ。

藍・高校生 1枚を取り出して見つめる。笑った顔。なの
に、

高校生 グシヤ。

真 キセキ。

高校生 グシヤ。

真 キセキ。

高校生　グシヤ。

真　キセキ。

藍　そして、握り潰された写真は転がった。

真　違うよ。波じゃない。キセキはまだ来てないよ。

昇子　でも、さつき。

真　風だよ。ビルとビルの間を吹き抜けるただの風。よ

く考えたら分かるのに、とっさに僕もキセキの波が来

たと思ったから。だから、

昇子　何コレ？クシヤクシヤ？

真　かえせよ。潰しちゃうんだ。キセキが起こらない

限り潰し続ける。

昇子　どうしたの、あんたさあ暗いよ。あんたさあ、あ

んな名前聞いてなかったよね。なーまーえ。ねえって

ば。

真　まこと。

藍　ほんの少し上唇が動いただけ。でも、立ち上がった

てこう付け足した。

真　だけどそのうち違うあだ名で呼ぶようになるよ、

きつと。いつもみんなそう呼ぶから。

真以外　何て？

真　カИБツ。

情報を見尽くして、雑誌を閉じて一息つく高校生たち。

耳年増 「S席500円、A席300円、チケットはお早めに」

野次馬 よし情報は揃ったな。

サーファー やっぱり井上さんが何かするんでしょうね。

野次馬 スポンサーってだけじゃないの？

耳年増 で、やっぱり行くんですね？

野次馬 俺は本当に急用なの。じゃあ、そういうことで。

サーファー じゃ、私もそろそろ帰ろっかな。

耳年増 私は…。

野次馬 もしかしてお前ら、行くの？

サーファー 行くわけないでしょ。私がそんなミーハーに

見える？

野次馬 副会長はまじめだもんな。

耳年増 私だって行かないわよ。

野次馬 それじゃ、今日はこのへんで。はい、今日も働

く生徒会、明日を導く生徒会、みんなのために活動し

ます。職権乱用、OKよ。おつかれさまでしたー。

それぞれ別々になってポケットからチケットを

こっそり。

3人 あぶなかった。S席のチケット買ったなんて言ったらバカにされる。あ、急がなきゃ。

ビルとビルの間をぬうようにして竜がにこやかに歩いてくる。

いろんな人達に握手を求められながら。

竜 みなさん。お元気ですか。調子はどうですか。今日

日は月に一度のビッグウェーブデイ第2回目です。チケットはもう買いました？

サーファー 井上さん、井上さん。どうやったらキセキの波を見れるんですか？教えてください。

竜 え？そりゃ静かに見てればいいんだよ。

サーファー 静かに見るんですね。ありがとうございます。

耳年増 竜さん。私、どうしても見たいんです。

竜 大丈夫。いくらでも見せてあげるからね。

耳年増 やったあ。ビッグウェーブデイ主宰からタイコバンもらっちゃった。

野次馬 井上さん。握手して下さい。

竜 しょうがないな。

野次馬 ありがとうございます。

高校生たち、それぞれ満面の笑みで去っていく。

まゆみ 井上竜さん。

竜 困ったなあ。今度は何だい？

まゆみ 笑い過ぎて目が無くなってるわよ。

竜 まゆみ、すごいんだよ。歩くたびに声かけられちゃって、昔に戻れた気分だ。やっと来たよ。俺の人生2回目のビッグウェーブ。みてるよ。ものすごい拍手と歓声をあびてやるんだから。

まゆみ スーツなんか着ちやって、張り切ってるのね。

竜 そりゃそうだよ。

まゆみ ネクタイまがってる。

竜 え？ホント？

まゆみ かして。

竜 まゆみ、今だったらやり直せそうじゃない？だってあのキセキの井上竜の彼女って言ったたら、鼻高いだろ？

まゆみ みんな竜のこと分かっててあのチケット買ってるのかな？

竜 え？

まゆみ はい、出来た。

竜 サンキュ。何が言いたいんだよ。

まゆみ だって竜の人体一覽なんてキセキでも何でもないじゃない。

竜 じゃ、まゆみ言えるか？頭の外からつまさきまで。

まゆみ あのね、言えるとか言えないとかそういうのじゃないなくて。

竜 俺が拍手と歓声をもらえるのはこれだけなんだから。

まゆみ ようするにちやほやされたいだけでしょ。

竜 「井上竜」ですって、自信を持って言えるのは、人体一覽があつてそこに拍手と歓声がついてくるからだよ。

まゆみ でもみんな竜が見たくてチケット買ってるんじゃないようなカンジがするから。私これでも一応心配して…

竜 前頭葉、後頭葉、

まゆみ そのくせがなくなる方がよっぽどキセキに近いわよ。

竜 まあ、そんな怒るなつて。とにかく今日のイベントが始まればまゆみだってすごいつて思うよ。きっとチケットは売れてるんだから、俺以外に何を見に来るっていうんだよ。な？もうすぐ開幕時間だから、そろ

そろ俺行くわ。まゆみも来いよ。

まゆみ まだ仕事あるから後でね。

竜 じゃ、いつものビルとビルの間で。

まゆみ 3丁目の交差点でしょ。

竜 絶対来いよ。

竜、かるやかに去っていく。

まゆみ、歩き出すとビッグウェーブデイチケット

トを握り締めた人たちとすれ違う。

まゆみ たくさんの人。あれだけチケット売れたんだも

んね。3丁目の交差点、すごい人だかりになるんじゃない？

ない？

しかしふと気付く。

まゆみ え？待って、何で？3丁目の交差点は反対方向

なのに…

人々の声、騒がしくまゆみをつつむ。

そのざわめきに耳を澄ます昇子。

昇子 何かあるのかな？今日はすごく騒がしい。あ、でもまつもっさん前に言ってたっけ？「騒がしいのはいつものことよ」って。

松本 ちよつと、ちよつとあんた。

昇子 まつもっさん。今日特別騒がしいけどやっぱりいつものこと？

松本 そんなことより、ちよつとこっち来て。いい知らせがあるの。

昇子 いい知らせ？

松本 分かったのよ。

昇子 え？

松本 あんたの身元。今、連絡があっただけど、よかったねえ。詳しいところまではまだ連絡待ちだけど、これで思い出せるかもね。

昇子 私か誰だか分かった？

松本 そうよ。飛田昇子。1981年11月25日生まれ。

○型。簡単なことはこれに書いてあるから。家族にはもう連絡してみたんだけど、もう少しここで生活訓練してから家に帰るのよ。心配してたみたいよ。ちよつと変わった体質してるからとりあえず目隠して欲しい、ってどういうことかしらねえ。詳しいことはすぐ資料

FAXするからって、どうしたの？

昇子 これが私？（と、紙をピラン）

松本 そうよ。

昇子 これが私なの。

松本 …ええ。

昇子 じゃあ、ここにいる私は？

松本 え？

昇子 私はこの人になるのよね。じゃあここにいる私

は？誰だったの？

松本 何、言ってるの？あなたは昇子ちゃんなの。

昇子 私、私、あたし、アタシ…

松本 ちょっとちよつと、何なのよ。

昇子 あたし、あたし、あれ？あたしって…？生活訓練

センター、松本さん、地下鉄の乗り方、タクシーの止

め方、左右反対の靴、落ち込む、元気、帰る場所、日

記、はじめまして、病院の廊下、「君こんな時間にどう

したの？」、朝、ビルとビルの間、あっ！

松本 どうしたの。

昇子 ビリビリしてる。あたし、あたし、ビリビリして

る。どこから来るんだろう。足？手先？違う、もつと

違うところから。これ、何だろ？

松本 落ち着いて。すぐ病院に連絡するから。

昇子 私はビリビリなの？

松本 あなたは昇子ちゃんなの。

昇子 私は……

松本 もしもし、すぐ病院に連絡して。それから詳しい資料早く持ってきて。ちよつと変わった体質のヤツ。

資料がすぐに持って来れないなら家族に聞くのよ。興奮してるから落ち着かせるわ。とにかく急いで。病院に戻した方がいいかもしれないから。(電話を切る)

いい？落ち着いて。ちよつと、昇子ちゃん？

昇子 ……はじめまして。

松本 え？あ……ええ、はじめまして。

昇子 私？あたし……

松本 ……そうね。……大丈夫よ。心配しないでね。ちよつと座って私とお話ししましょうか。私の名前はね、松本よ。

松本が資料に目を通してしている間もビルとビルの間は騒がしい。

野次馬 やった。やつときたよ。でもどこのビルとビルの間に来るんだ？お、あつちは人だから。いや、惑わされちやいかん。何かヒントないのかな？

松本 もしもし、資料FAXしていただいてありがとうございます。ごじます。こんな夜遅くにすみません。たすかりました。以前そちらの病院に通院していたようで。ええ、できれば明日にでも来て頂けますか？ええ、こちらはただの生活訓練センターですから。とにかく今夜一晩はこの注意事項を守ればいいんですね。はい、宜しくお願いします。失礼致します。目隠しはしたし、とにかくこれでOK。はあ1疲れた。飛田昇子、深心逆行性。深い心の逆行ねえ。

耳年増 よし、ここに決めたつと。とにかく信じて待つ
のよね。

松本 自分が自分であったと確信が出来る年令にまでさかのぼる症状。そこからまた成長し始める。この場合さかのぼった年令と現実の間の記憶、習慣は欠如する。欠如してしまつた習慣、言語などは何度か繰り返し返せばすぐ身につくが欠如した記憶は諦めるしかない。

野・耳 あ！

野次馬 書記！

耳年増 会長！

野・耳 ウソツキー

松本 眼球から入ってくる外部の情報、TV、色、人ご

み、文章、表情、それらを視神経から受け取った脳が自分の存在を脅かす危険なものだと思い、確固たる自分を提示しようと探し、逆行してしまう。

サーファー 波はどこ？（サーファー姿）

松本 もううるさいわね。何なのいったい！…えーつと、今まで2回幼児期まで逆行。9歳の時鏡を見て逆行。

この時1番目の昇子が消滅。12歳のアルバムを見ていて逆行。2番目の昇子消滅。じゃあ私と会っていたのは3番目？でも名前も覚えてなかったから4番目かしら？とにかくさつき自分の資料を見て逆行したから、全部忘れて次の昇子になったってわけか。何を見て逆行するかは分からないので、一時的な逆行防止のために目隠しをすること。もっと根底から逆行を止める解決方法として、自分という認識が必要。ささいな事でかまわない。大抵の人は家族であったり自分の地位であったり、何かを見つけたその時に逆行を止めることが出来る。何も見つけられなかった場合幼児期まで逆行してしまう。あれ？ちよつと待って、あの子。初めにここに来た時は幼児期じゃなかったわ。さつきだった。ということは…

野次馬 副会長。

サーファー 会長に書記。

耳年増 どうしてここに？

サーファー あんた達、誰？

野・耳 ばれてるよ！

それぞれの夜がふけていく。

二場

ビルとビルの間で。

藍 ジーカシヤ。私の部屋の天井、茶色のドアノブ、黄色いコップ、目玉焼き、赤いリボンの制服。私の横を通って行った青い自転車のクラスメイト。私が見たものはここにも無い。だからやっぱりビルとビルの間を探してしまう。もしかしたら。また。また。私の頭蓋骨のうらつかわで息づいている動き、表情。あの日からずっと。どこ？どこにいるの？

藍、ビルとビルの間を探しながら去って行く。

そんなころ違うビルとビルの間では。

竜 あれ…？

高校生 あれ…？

竜 何で？

高校生 どうして？

竜 何で誰も来ないんだよ？

高校生 どうして何も起こらないんだろ？

竜 おかしいな。チケットは売れてるのに。

サーファー 目隠ししてるけれど何も起こらないし。

野次馬 いろいろ写真潰してみただけさ。

耳年増 一応じーつと見てるんだけどね。

野次馬 来ないね……。キセキ。

サーファー やっぱりヒント取り間違えてるんじゃない？

(と、目隠しをはずす)

携帯電話の音。

サーファー あ、もしもし。ゆうじ君、そっちどう？ダメ、

あそう。(電話を切る)

また、携帯電話。

サーファー もしもし、つよし君？そっちは？やっぱりダ

メ。あ、そう。え？直接カメラちゃんにヒントを聞くの？そう、ありがと。(電話を切る) 会長。

野次馬 話は聞いた。そうだよ。初めからカメラちゃんに聞けばよかったんだ。

耳年増 今の電話、誰？

サーファー 海の男はやさしいのよ。

野次馬 よし。さっそく会いに行こう。

サーファー え？居所知ってるの？

野次馬 副会長、聞いたんだろ？その海の男に。

サーファー ううん。だから今から探しに行くんだって。

野次馬 なんだ。

耳年増 探しに行こっか。

野・サ え？

耳年増 情報はね、自分の足で探すのが一番なの。

野次馬 書記。お子様だと思っていたのに、たくましくなったな。

耳年増 そりゃ、キセキの波欲しいですもの。キセキの波ってあの波のことでしょ？

耳年増、思いつきエロ本を握っている。

サーファー ええ、あの波よ。

サーファー、サーフボードをしつかりと持って
いる。

野次馬 確かカメラちゃんってビルとビルの間に出没す
るんだよな。

耳年増 かたっぱしから当たりましようか。

サーファー 何だか宝探しゲームみたいね。

野次馬 よし、行こう。

耳年増 こんなアタフタしてる私達をきつと井上竜さん
はどっから兎てるのかな？

サーファー そりゃ主宰だから高層ビルの最上階でワイン
飲みながら、

野次馬 「はっはっはっ、てこずってるな」

サーファー って、楽しんでるんじゃないの？

野次馬 とにかくカメラちゃんを探そう。

高校生たち、団結して去って行く。

違うビルとビルの間で。

竜 誰も来ないよ。どうして？はい、チケット次々に
モギっちゃうよ。押さないで、並んでね。ってなるは

ずなのに…

まゆみ 竜く。

竜 まゆみ、一番目のお客さんだよ、お前。チケットどうぞ。

まゆみ 来ないよ誰も、きつと。来たとしても竜を見に来るんじゃない。

竜 は？

まゆみ もう、とにかく撤収しなさいよ。

竜 いきなり何だよ？理由をちゃんと見えよ。

まゆみ だから言ってるじゃない。とにかく帰ろう。

竜 ちょっと待ってってば。

竜はまゆみに連れられて帰らされようとする。

そこへ藍。

藍はその二人の後ろ姿を見てハツとした。

藍 もしかして。待って！まこっちゃん、昇子ちゃん？

振り向く竜とまゆみ

チリリン。

竜 ほら、お客さんだ。あ！…

まゆみ カメラちゃんだ。

藍 すいません。間違いました。ごめんなさい。そうよね、そんなわけないもんね。もういなくなっただから。

竜 今日はどうもありがとう。じゃあこれから僕がキセキを起こすよ。

まゆみ あんた私の言ってること理解しなさいよ。

藍 これから私はどうしよう。

竜・まゆみ え？

藍 これから、眼球から入る外部の情報を無くしてしまおう。ここに映し出されるものだけ見つめ続けよう。それが私の見たいものだから。

藍は目を閉じた。

昇子、シャツターを切る。

昇子 ウソつくなよ、まこっちゃん。

真 ウソじゃないよ。

昇子 そんな作り話誰が信じると思うの？

真 本当のことなんだってば。

昇子 ほうほう、ほうほう。(と、ハタハタと真を触って)

真 何だよ。

昇子 カメラちゃん、こっち来て。ほうほう、ほうほう。

(と、藍をハタハタ触る)

藍 やだくすぐったいわよ。

真 何してんの？

昇子 どこがどうカИБツなのよ？別に何も変わったとこないじゃないの。「風だよ」とか、かっこいいこと言っちゃって。私のことウソつきって言ったくせに自分の方がウソつきじゃない。カИБツって言ったらキバとかツノがはえてるでしょ。私ちゃんと教えてもらったもん。見たこと無いけどキバとか触れば分かるもん。それに言葉を喋るんじゃないくて、ガオーって言うんじゃないの？いくら私か5年目だからってそんなウソに騙されません！…

真 そういう意味じゃなくて。

昇子 何これ？

真 カメラだよ。ポラロイド。

昇子 ポラ？…

藍 写真がでてくるの。撮ったらすぐに見れるのよ。

昇子 ほら、カИБツがどうしてそんなカメラなんか持っているのよ。

真 それは…

昇子 かして、かして。へんな形。

真　　すぐにかえせよ。

昇子　やっぱりはやく目隠しとりたいな。写真かあ。撮ってみたいなあ。ねえ、私どんな顔してるの？カメラちゃんは？まこっちゃんは？

藍　　どなって、説明しにくいけど、少なくともまこっちゃんはキバとかツノのはえてるカイクツじゃないよ。昇子　やっぱりね。ウソツキ。

真　　だから意味が違うんだよ。キバとかツノがはえてる人間がいるわけ……

チリリン。

藍　　あ、あれ。さっき撮ってたネコじゃない？ねえ。

昇子　ネコ？ネコってニヤーっていうヤツ？……

藍　　触ったことないの？

昇子　私、カメラ撮る。撮って目隠しはずしたら自分の撮ったネコを見るの。どこらへん？

藍　　もう少し右よ。それ左。おはし持つ方。

昇子　あ、こっちな。…、とことん子供あつかいだね。

藍　　分かりやすかったでしょ？

真　　かえせよ。カメラ。

藍　　いいじゃない。1枚くらい撮らせてあげれば。

真　だめだよ。早くかえさせてば。頼むよ。撮りたいんだ。

昇子　私が撮るの。

真　僕が撮らないといけないんだ。じゃないと。

藍　じゃないと?…

昇子　ニャーオニャー。

真　なあ、いい加減にしろよ。

昇子　あつ。力づくで取っちゃダメだよ。負けるに決まってるんだから。

真　そんなことしないよ。触っちゃダメなんだから。

藍　え?

真　お願いします。

昇子　い…や。

真　…もう、ダメだ。

藍　ジーカシヤ。塞き止められた感情。引きがねはネ

コの声。弾丸のように走り出した。私の横をすり抜けて。3番目の昇子も追い越して。泣き声のする方へ一

直線。

真　僕が悪いんじゃない。

藍　ジーカシヤ。事実を鮮明に。コマ送りのように。

1秒をもっとこまかく私は見逃さない。ぎこちない手つきでふわふわのかたまりを捕まえる。

真 だってカメラかえしてくれないから。

藍 ジーカシヤ。事実を克明に。私が見たもの。

藍真 ≡かわいい≡

藍 そう言っとうれしそうに抱きしめた。

真 やっぱ写真じゃダメだ。僕はただ…

藍 笑った顔、なのに。

全ては昇子の視点。

声しか聞こえない闇の中。

ネコの悲鳴。

そして、藍の悲鳴。

昇子 どうしたの？ネコちゃん、カメラちゃん。ま

こっちゃん。何かあった？ねえ…

真 …また、やっちゃった。だからかえしてって言ったのに。

藍 何でこんな事するの？

真 ごめんなさい。

藍 謝ったってしょうがないじゃない。焼きついちゃったわよ。

真 ごめんなさい。もう何にも触りません。写真しか触らないから、ごめんなさい。許して下さい。僕はた

だかわいいなあと思って。

藍 こっち来ないでよ。

真 いつもみんなそう言うんだ。

藍 だからカイクツなんだ。

真 いつもみんなそう言う。だけど、違う。潰したいんじゃない。

藍 こっち来ないで。

真 ……ごめんね。もう帰るから、ごめん。

昇子 ねえ、まこっちゃん。

真 え？

昇子 こっち来て。頭、おでこ、目、ほっぺた、口、アゴ。大丈夫、キバなんてないんだからカイクツじゃないよ。

昇子の視点からだんだん元の明るい世界へ。

藍 目隠ししてたからそんなこと言えるのよ。私はち

やんと見たんだから。

昇子 だけど指先から見えるものもあるよ。肩、腕、手のひら、指。ほら、だんだん見えてきた。

真 ……さすが、人生5年目のお子様の考えだね。

昇子 どうして潰しちゃうの？…

真 昔、昔、カイクツは初めて黄色いひよこを見ました。

藍　それが関係あるの？…

真　縁日でやってるひよこ釣り。I匹釣れてうれしくて、手のひらで小さなひよこはヨタヨタして、ふわふわした毛と黒い目とちっこいくちばしがかわいくて。初めて思いっきり抱きしめました。やわらかい感触。それが生暖かい感触に変わった瞬間。横っ面をはたかれた。もう2度とこんなことをしないように、やわらかい感触のかわりに冷たいカメラを手渡された。抱きしめなくなったら写真に撮りなさい。それでもあの感触が忘れられなくて、でもやっぱり潰してしまう。

昇子　だからこのカメラを持ってたの。

真　カイブツはキセキが起こらない限り人間にはなれないのでした。おしまい。

藍　私、帰る。怖いもん。

真　いいよ。僕が帰るって言ってるだろ。

昇子　ちよつと待って。

藍　何よ。

昇子　もしよ、もし、まこっちゃんが潰さなかったらそれってキセキだよね。

藍　それが何？

昇子　私、ずっと考えてたの。キセキの七色の波に触れてどんなキセキが起こるのかな？って。私はどんなキ

セキが見れるんだらうって。

藍 この子が潰さないことがビッグウェーブデイのキセキだって言うの？

昇子 だって私とカメラちゃんはキセキが見たい。まこっちゃんはキセキの波に触れてキセキを起こす。すごいそろってるじゃないねえ。

真 都合いい解釈だけど、そうならいいのに。

藍 もういいわよ。私、帰る。キセキが来なかったら潰しちゃうじゃない。そりゃ昇子ちゃんは目隠ししてるからいいけど、私は焼き付いてしまうの。ここにあるグシャァとした瞬間が焼き付いてるの。これ以上見たくないから。

昇子 好きで目隠ししてるんじゃないもん。

藍 …ごめんなさい。ちよつと言い過ぎね。本当にごめんなさい。だけど帰るわ。笑った顔して話し掛けて来て恐い。さようなら。

昇子 本当に帰っちゃうの？カメラちゃん…ちよつとー

真 もう行ったよ。

昇子 あーあ、だわ。せつかくキセキが見れるのに、ね。

真 しょうがないよ。普通だったらみんなああ言うから。

昇子 私は普通じゃないの？

真 普通っていうか、感覚が全然違うのかな。なんせ、

昇子 5年目のお子様でしょ。もう聞きあきた。

真 恐くない？

昇子 私のこと潰しちゃうの？

真 ネコ、犬、ウサギ、鳥、ちようちよ、金魚、花。

今まで潰してきたもの。抱きしめたかったもの。

昇子 かわいいと思ったもの？

真 そう、だから昇子は安心していいよ。

昇子 そっか。あれ？それ、どういう意味。

真 そういう意味。

昇子 あんたムカツクわ。いいいいいいつ。

真 カーツ（威嚇）。ってやっても見えないか。

昇子 ねえ、さつき昇子って呼んだ。

真 うん。だって昇子なんだから。

昇子 3番目って区別しなかった。

真 ややこしいじゃない。それに1番目も2番目も知

らないから、別に昇子だけで分かるし。

昇子 へへへ。そっか、昇子か。何も区別しない昇子か。

真 何？気持ち悪いな。

昇子 何でもない。

真 何？気持ち悪いな。

昇子 何でもない。

真 カメラちゃんに悪いことしたな。

藍 ホントに帰っちゃったんだね。

藍 ホントはビルの影にいた。何だか帰れなかった。
じつと黙って見つめ続けた。

真 いつもばれないように笑って明るくするんだ。その時はみんなまことって呼ぶんだけどグシャってやっちゃうと、すぐにあだなが付くんだ。

藍 あだな。

昇子 カイブツ。

藍 カメラちゃん。

真 毎日そう呼ばれると、もしかしたら本当に僕はカイブツなんじゃないかって思えてきて。

藍 精巧なカメラなんじゃないかと思えてきて。

昇子 潰したかっただけ？

真 違う。

昇子 かわいいって思ったからでしょ？でも本当にかわいいなら加減したらいいのに。

真 どうやって抱きしめるかなんて教えてもらわなかったもん。いつもこのカメラとつるつとした写真だけ。このままだったら本当にカイブツになってしまいそうだから。

藍 本当に精巧なカメラになってしまいそう。

真 誰も本当の名前を呼ばなくなるだろうなって。

藍 誰も本当の名前を呼ばなくなった。

真 だけど潰したのは事実だし、自業自得かな。さっきのネコも、ごめんなさい。

昇子 大丈夫。謝ったら許してくれるよ、ネコちゃんだつて。ねー、ニャーオ、出ておいで、ニャオニャオ、ちゃんともこっちゃん謝ってるからねえ。出ておいでってば。

真 あのさ。

昇子 ちょっと待ってよ。ネコちゃん呼んでるんだから。

真 潰すって意味分かってる？

昇子 へ？

真 潰すんだよ。呼んだって返事するわけないだろ？

昇子 ？

真 そうか、そうか。何だ、そうだったんだ。そりゃ恐くないよ。

藍 そうか、5年目のお子様がその意味を理解するのは難しい。

昇子 何よ。またバカにしてるな。その言い方は。

真 潰すっていうのは、

昇子 うん。

真 僕のこの手が、

昇子 うん。

真 息を止めるってこと。

昇子 うーん？

真 だから…、昇子が一番分かるかもしれない。

昇子 ……

真 消えて、無くなる。ネコの体はここにあるけど、

心が跡形もなく消えてなくなった。僕が消したんだ。

潰すっていうのはそういうこと。

昇子 跡形もなく無くなる。じゃあ2番目のネコちゃん

になるの？…

真 ならない。ずっとずっと、無くなったまま。3番

目にも4番目にもならない。ただ消えただけ。

昇子 じゃあ…

真 今度こそ恐くなった？…

昇子 じゃあ、かわいそうだね。

真 はいはい、嫌っていうほど聞かされたよ。いろん

な人にその。かわいそうって言葉。

昇子 まこっちゃん、悲しいでしょ？

真 え？…

昇子 かわいって思ってぎゅうってしたくらい好き

なのに自分で消しちゃうなんて。何にも触れなくなる

もんね。でも、キセキが起これば幾らでも。ぎゅうつ

て出来るのにね。そしたら消えないし、ネコちゃんも

まこっちゃんもうれしいいうれしいじゃない。

真 カイブツは人間になれるかな？…

昇子 だからキバないんでしょ。

真 中身の問題だろ。

昇子 本物のカイブツは、そんな悲しそうな声出すのかな？

真 お前。

昇子 何？

真 本当にバカか？

昇子 正直に言ってるだけなのに。

真 バカかポリアンナじゃなきゃそんなこと言えないよ

昇子 ポリアンナって何？、

真 よかった探しだろ。

昇子 何言ってるの？まこっちゃんへんなの。

「カシヤ」

思わずシャッターを切った真。

昇子 どうしたの？また抱きしめたいものがあつたの？

真 …ううん。別に何でもない。

昇子 ねえ、やっぱりカメラちゃん戻ってこないのか

な？呼んだら戻ってくるかな？カーメラーちやーん。

真　ネコじゃないんだから。

昇子　カーメララーちゃん。

藍　そんなに呼ばないですよ。今さら出れないじゃない。ちよつとまこっちゃんに酷いこと言ったかもしれないし。でも酷いことしたのはアイツなんだけど。

昇子　カーメララーちゃん。まこっちゃんも呼んでよ。

真　ムリだって。もう電車に乗ってるよ。それに、嫌がるよ。

昇子　早く早く早く。さんはいっ。

真・昇子　カーメララーちゃん。

藍　ニヤオ。

昇子　あれ？ネコちゃん？

真　違うよ。ネコまねしたカメラちゃん。

昇子　よかった。やっぱり同盟組んでることだし、最後まで3人で待ちましょう。

真　ごめん。

藍　私も、キセキやっぱり見たいから。けどもう二度としないでよ。本当にキセキが起こるまで。

真　うん。

昇子　大丈夫。絶対来るよ。

藍　それからもうカメラちゃんって呼ぶのやめて欲しいの。ちゃんと名前があるから。

藍 あい。私は精巧なカメラじゃなくて、藍なの。

現実の声に呼ばれる藍それでも再生をやめること
はない。

野次馬 カメラちゃん。

耳年増 カメラちゃん。

サーファー カメラちゃん。

藍 違うの。私は藍なの。カメラってもう呼ばないで。

真 分かった。もう呼ばない。

野次馬 カメラちゃん、それから？続きは？

昇子 ビッグウェーブ同盟の続きしましょ。

耳年増 キセキの波はどうやって来たの？

サーファー もしもし、カメラちゃん見つけたよ。え？そ

っちも見つけた？それきつとニセモノよ。うん、3丁

目ね。

耳年増 情報、情報。

野次馬 何だかのってきたねえ。

高校生 続き、続き、続き、ヒント、ヒント、ヒント♪

高校生たちの言葉をビルのかけから見ていた竜
とまゆみ。

真・昇子 名前？

竜 これは。一体どーいうことなんだ？

まゆみ ビッグウェーブ違いね。

竜 だってこれは俺のイベントなのに。

まゆみ みんな竜のことはただのスポンサーと思ってる
みたい。

竜 じゃあ、人体一覽のキセキの記憶少年の井上竜は。

まゆみ 竜、がっかりすると思ったから早く帰ろうって
言ったのに。

竜 でもこれは俺の…

藍は再生し続ける。

藍 それから真はネコを抱き上げて、アスファルトの

スキマの土を掘り返した。ザク、ザク、ザク、ザク。

野次馬 土だ、土だよ。

藍 花壇の土は固くなっていたけど、爪と指の間が黒
く染まつても掘り返した。

サーファー 掘り返すのよ。

真 ほつたらかしにしちやいけないしね。

昇子 消えたら土の中に入るの？

藍 そう、アスファルトの上じゃ冷たいじゃない。

耳年増 ねえ、副会長。このヒントで何かつかめそう？

サーファー やめて。副会長じゃないわよ、私。

野・耳 え？

サーファー もうひとつヒントがあったの忘れたの？

真 藍。

昇子 藍ちゃん。

藍 どのくらいこの名前で呼ばれていなかったんだろ

う？なつかしいとさえ思う。

野耳 本当の名前を言うこと。

サーファー 私は制服キツチリ着こなす副会長じゃなくて、波乗りよ。

野次馬 それはサーファーってこと？

サーファー 今風に言えばそうね。サーファーなら誰だつてビッグウェーブには挑戦したいのよ。

耳年増 え？でも波ってあの波でしょ？

サーファー このボードで七色の波に乗りまくってやるの。

耳年増 私はてっきりあっちの波か。

サーファー あっちって何だ？

耳年増 すいません。私、本当は耳年増なの。

野次馬 ミミドシマ？だからあっちの波なのか？

耳年増 ええ、快樂の波だとばかり。

野次馬 子供だと思っていたのに、そんな言葉どこで覚えたんだけ？

耳年増 子供だから耳ばかり成長するの。情報ばかり頭の中でぐるぐる回ってるだけ。

野次馬 あっ、こんな雑誌買いやがって。

耳年増 みんな言うの。快樂の波に揺られてる時が最高だって。みんな、燃える炎が見えたとか、花火が上がったとか、絶頂の瞬間を言うんだもん。

サーファー 幻聴かしら？書記の口から大胆な単語が。

耳年増 きっと私のエクスタシーは波なのよ。それがビッグウェーブ。

野次馬 その前に相手見つけろよ。

サーファー 違うわよ。波乗りのためのビッグウェーブなの。ねえ、会長。

耳年増 違う。快樂のビッグウェーブ。みんなエクスタシーになれるのよ。ねえ、会長。

野次馬 どっちでもいいよ、そんなもん。

サ・耳 え？

野次馬 どんな波だってどうでもいいんだよ。みんながそれに乗って騒げば。人ごみ、人波、大事件、それが

俺のビッグウェーブ。

サーファー 会長？あなたもしかして。

野次馬 そう、俺本当は野次馬なんだ。生徒会長なんて呼ばれてるから騒ぎが起こってもなだめる方にまわってたけど、本当はその騒ぎの中に混じりたくていつもウズウズしてるの。たまんないね、あの人ごみ。

耳年増 3人バラバラね。

サーファー でもキセキの波なんだから、何でも来いってカンジじゃないかな。

野次馬 そうだよ。とにかくヒントを集めてキセキの波を起こさなきゃ。

耳年増 S席500円だもんね。

野次馬 土だよ。掘り返せ。

サーファー 何を埋めるのかな？

野次馬 そりゃ、ネコだろう。

昇子 私も消えたら土の中に入るのね？

藍 そう、みんなみんな土の中。

耳年増 みんな？

藍 そうして真はきつと祈ってた。

サーファー 祈る？

野次馬 何を祈るんだろう。

藍 ネコに対してなのか。

サーファー 野次馬、ネコ探して来て。

藍 今まで潰してきたことに対してなのか？

野次馬 さつき潰した写真はあるんだけど、これに祈るの？

藍 それとも、キセキが起こることに対してなのか。

高校生 キセキに対して。

野次馬 土の中。

耳年増 ネコ。みんな。

サーファー 祈る。

高校生 うくくくん？

藍 私も昇子も祈っていた。真につられて、ただ祈っていた。少なくとも私はこころの中で呟いていたもの。

キセキよ来い。

竜 キセキよ、来い？

藍 ぼっかりあいた土の中にそつとそつと。

真 そーと、そーと。これ以上潰さないように。

昇子 ネコちゃん、埋めちゃうのね。

藍 祈りながら。

真 これ以上潰さないように。

藍 ずっと祈ってた。私も昇子も。

高校生 キセキよ、来い。

竜、たまらず高校生たちにつめよった。

竜　ちよつと待てよ。これは俺のイベントなんだからな。

まゆみ　竜、もうやめて帰ろう。

野次馬　そうか！

サーファー　何か分かった？

竜　ちよつと聞いている？

野次馬　土を掘るだろ？ネコ、埋めるだろ？それでキセ

キよ来いって祈る。ってことは、これ何かに似てな

い？ほら雨乞いとか、あれなんて言うんだっけ。とに

かくささげるやつ。

サーファー　生け贄のこと？

竜　あのな、これは俺のビッグウェーブ、

耳年増・会長　じゃなくて野次馬頭いい！

サーファー　たった5000円でキセキ見ようなんて罰当

たりだもんね。

竜　俺の人体一覧なんだよ。

耳年増　ネコ、ネコ探して来ようか。

まゆみ　もう誰もあんたのことは見に来ないの。カメラ

ちゃんを…

野次馬　やっぱり生け贄はでかければでかいほどいいん

じゃない？

サーファー　じゃ野次馬生け贄になれば？

野次馬　やだよ。生け贄っていったら昔から女の人の方
だろ。

竜　あのな、俺がビッグウェーブ主催なんだよ。

高校生　知ってる。

野次馬　俺達今頑張ってるんですから、どうぞワインで
も飲みながら見てて下さいよ。

まゆみ　ねえ竜。カメラちゃん、ちょっと様子おかしいよ。

竜　知らないよそんなこと。俺は井上竜なの、分か
る？聞いている？

まゆみ　ちょっと聞こえてる、私の声。ねえ、大丈夫？

藍　ただ待ち続けた。見上げれば、月はどんどん高く
なる。キセキを欲しがる私達はただひたすら。

まゆみ　病院に連れて行った方がいいんじゃない？

まゆみ、高校生に捕まえられる。

まゆみ　え？何？何なのよ、ちょっと！

野次馬　厳密な会議の結果、あなたに決定しました。

高校生　おめでとう！

まゆみ　は？

耳年増　これでキセキが来るわ。

まゆみ え？

サーファー 恨むんなら自分を恨んでね。生け贄は美女って相場が決まってるから。

竜・まゆみ 生け贄？

ビルとビルの間が騒がしいころ、生活訓練センターにいる昇子はハツとした。

昇子 あっ、ビリビリしてる。私、ビリビリしてる。どこから来るんだろう。指先？ううん、もっと違うところから。まつもっさん…まつもっさん…来て来て。

松本 何？どうしたの？眠れないの？

昇子 私、ビリビリしてるの。

松本 あんた覚えてるの？

昇子 何を！

松本 さつき寝る前にビリビリした時のこと。逆行した

時のこと…

昇子 今よ。今初めてビリビリしてるの。

松本 えーと、ということは、4番目がビリビリしていきな
くなつて、5番目のあんたもビリビリ？ややこしいわ。

昇子 あれ？

松本 何？

昇子 ここから？

松本 床から来るの？

昇子 少し強くなった。あ、こっちから。

松本 ちょっと勝手に外に行ったらだめよ。

昇子 だってこっちから来るみたい。これたどって行つたら、私どこに行くんだろう。

松本 待ちなさい。もう真夜中なのよ。

昇子 だってビリ、ビリ、呼んでるみたいに。ビリビリどこから？

松本 分かった。私もついて行くから。

昇子 何だろう、これ。私、何なの？このビリビリ。私、松本 だめよ。深く考えちゃあ、また…

昇子 だって気になるんだもん。何なのこれ！（もどかしくて目隠しを外した）

松本 こんなビリビリ無い方がよかった？少しでも覚えてたらよけい悲しい？

昇子 何言ってるの？まつもっさん。

松本 何にでもなれるって言ったけど、やっぱりあんた探してるのね。

昇子 え？

松本 何でもないわ。そうだ、目隠しがいるわね。

昇子 目隠し？あ、こっちからだ。まつもっさん、こっ

ちよこつち。

松本 まあいいか。何かあったら私が手で隠せばいいか。
一応まだあなたの担当は私なんだし。これも何かの縁
ねえ。

昇子 何言ってるの？

松本 私かっこいい。さあどこでもついて行くわよ。迷
子にならないようにね。

昇子と松本、ビルとビルの間の人波を掻き分け
ながら進んでいく。

昇子 ビリビリ、私のビリビリ。どこから私を呼ぶの？

松本 ちょっと、5番目の昇子ちゃん、はぐれちゃだめよ。

昇子 ビリビリ。

松本 何なの？どうしてこんな真夜中に人がウジャウジ
ヤいるの？

どこからなのか、誰の声なのか、風に乗るよう
に聞こえて来る。

「祈るんだって」

「祈るらしいよ」

「土の中だって」

「土の中らしいよ」

「消せばいいんだって」

「消すらしいよ」

「生け贄をささげるんだって」

「生け贄をささげるらしいよ」

松本、急いで走り去る。

まゆみをささげ物として高校生ははしやぐ。

竜はただ呆然。

高校生たち、土を掘りだす。

昇子　ビリビリ、これは誰のもの？

松本　何だか今日は変ねえ。やだ、鳥肌立ってきた。

「あとは待つのみ」

「キセキよ、来い」

「あとは待つのみ」

「キセキよ、来い」

「あとは待つのみ」

「キセキよ、来い」

「あとは待つのみ」

「キセキよ、来い」

松本 もう、うるさいわね。ガキども、早くうちに帰って寝なさい。こっちは24時間勤務中なのよ。

人波はひいて、松本が一人ポツン。

松本 あら、昇子ちゃん？ちよつとどこにいるの？昇子ちゃん、5番目の昇子！

返事はない。

松本 やだわ、大変。

野次馬 駄目じゃないか、生け贄らしくなくちゃ。

サーファー 次に土の中、中、中。

耳年増 中、中。

野次馬 中、中。

笑いながら高校生たち、まゆみをアスファルトに押し付ける。

まゆみ ちよつと竜、どうにかして。死んじゃうじやな

いよ。

サーファー 大丈夫。キセキが来るんだから息も吹き返すわよ。

野次馬 そうなったら大事件だね。

まゆみ 竜！

竜 お前らね、何を間違えてるのか知らないけど、このチケットは俺のイベントなんだよ。

野次馬 あとは待つのみです。

サーファー これでやっとキセキが来るんだから。

耳年増 ジタバタしないでよ。

竜 離せよ。苦しがつてるだろ。大丈夫か？

まゆみ ゴホゴホ。(□の中の土を吐き出す)

野次馬 ひどいな、井上さん。せっかくあとはキセキが

来るのを待つのみだったのに。

昇子 ビリビリ、私のビリビリ。どこから私を呼ぶの？

松本 ちょっと、5番目の昇子ちゃん、はぐれちゃだめよ。

昇子 ビリビリ。

松本 何なの？どうしてこんな真夜中に人がウジャウジャやるの？

昇子 ビリビリ、これは私？

松本 いつもはもっと静かなんだけど。

野次馬 あとは待つのみ！

耳・サ キセキよ来い！

野次馬 キセキよ来い来い。

サーファー 来いよ、来い来い。

耳年増 早く来てエッー

サーファー 私のも。

野次馬 俺のも。

耳年増 私のも。

高校生 ビッグウェーブー

野次馬 まず土を掘れ掘れ掘れ掘れ。

耳年増 掘れ掘れ。

サーファー 掘れ掘れ。

まゆみ 何よ、この子たち。

耳年増 生け贄が逃げるわよ。

サーファー 捕まえて。

竜 何言ってるんだよ。

耳年増 ひどいわ。こんな私にしたのは竜さんよ。

竜 変な言い方するな。

高校生 このチケット握り締めた瞬間からずっとキセキ

を待ってるの！

竜 キセキを取り間違えてるんだよ。

野次馬 じゃあ、本当のキセキは？教えて下さいよ。

高校生 ビッグウェーブデイの主催！

竜 見せてやるよ、これが俺のビッグウェーブ、キセキの人体一覽！…前頭葉、後頭葉、頭蓋骨、大脳、中脳、前脳、間脳、延髄、前頭骨、側頭骨、後頭骨、冠状縫合、鼻骨、涙骨、頬骨、上顎骨、下顎骨、前頭筋、鼻根筋、上唇拳筋、笑筋、口輪筋、オトガイ筋、頸椎、隆椎、胸椎、腰椎、仙骨、尾骨、鎖骨、胸骨、肋骨…

高校生たち、どんどんバカらしくなってくる。

野次馬、花壇から1つ石を拾って竜に投げつける。

竜 !?

野次馬 バカじゃないの？

竜 まだ終わってないんだよ、続きが…

耳年増 バカじゃないの？

次々に石を投げつける高校生達

まゆみ 竜、いくらやったって無理よ。

竜 だけど、眼球、角膜、前眼房、光彩、瞳孔、水晶体…

サーファー それのどこがキセキよ？

野次馬 俺達はビッグウェーブ待ってるんだよ。

サーファー 七色のキセキの波。

耳年増 快樂の波。

サーファー 波乗りの波。

野次馬 人波を待ってるんだよ。

竜 だからこれが僕のキセキだったんだ。唯

一、拍手と歓声をあびるためのキセキ。

野次馬 本当のキセキはそんなんじゃない。

耳年増 本当のキセキ。

サーファー 本当の…

その時、藍の言葉に高校生たちは手を止めた。

そして藍の話に聞き入る。藍しか知らない、そ

こにはもう無い時間の話。

藍 だけどいつまでたってもやっぱり何も

起こらなかった。月が白くなった朝方の空を

見上げて。

真 もうすぐ朝一番だ。

藍 だんだんあっちの空が白くなってきたよ。

真 期限切れか。

藍 やっぱりインチキだったね。

真 また罰ゲームって言われるよ。

藍 違うのよ、今のはね。

昇子 どうしよう。

藍・真 え？

昇子 どうしよう。朝になっちゃう。でもキセキが来ない。七色の波が来ない。来なかったら私。

藍 昇子ちゃん？

昇子 まこっちゃん、何か抱きしめてみて。花でも何でもいい。

真 ダメだよ。潰しちゃうんだって。

昇子 どうして？何でキセキは来ないんだろう？チケツト必死で買ったのに、どうして来ないの？七色の波。

藍 夜は駆け足で逃げて行く。期限切れまであと少し。

高校生に見つからないようにこっそりまゆみ
が
竜に言った。

まゆみ 竜、早く今のうちに帰ろう。

竜 まゆみ。俺、何だろう。井上竜って何だろう？

まゆみ 早く行こう。

二人はその場を離れるが、ふと竜が振り向く

「夜は駆け足で逃げて行く」

「逃げていく」

「期限切れまであと少し」

「あと少し」

藍 朝になればビッグウェーブ同盟は終わる。

「朝になれば」

「ビッグウェーブ同盟は終わる」

まゆみ いろんなビルとビルの間から聞こえてくるね。

竜 カメラちゃんという言葉が風に乗ってるみたいだ。俺のイベントだったのに。何だろう？目に見えないビッグウェーブつてやつが本当に存在するみたいだ。

まゆみ ゴホゴホ…土に埋められて窒息死ってニューースにならなきゃいいけど。

竜 始めたのは俺だよ。どうにかしなきゃ。

まゆみ もう收拾つかないよ。だけど朝になれば。…ほら夜が明ける。

「朝」

「朝」

「期限は切れた」

「キセキは来なかった」

「朝」

「朝」

「期限は切れた」

「キセキの夜は終わった」

「朝」

「朝」

「期限は切れた」

「キセキは来なかった」

「朝」

「朝」

「期限は切れた」

「キセキの夜は終わった」

「終わった」

「オワッタ」

「オ・ワ・ツ・タ」

どんだん声達は消えて行く。

朝がやってきたのだ。

まゆみ　ねえ、もしかして納まったんじゃない？何も聞
こえない。

竜 …みたいだな。

高校生たち、とぼとぼと歩いてそれぞれ帰る。

竜 あれだけ騒いで朝になったらいつもどおりになる

ってわけ？

まゆみ 何だったんだろうね、昨日の夜って。

竜 キセキでも何でもないか。

まゆみ とにかく終わったのね、ビッグウェイブデイは。

竜 俺の知らないうちに。

まゆみ もう土だらけ。竜、タクシー、ワリカンしようよ。

竜 うん。

ふと竜は何かを考えた。

自分が逃げ出してきたビルとビルの間をみつめた。

藍 キセキが起こらないと言って昇子は嘆いた。

まゆみ どうしたの？

昇子 だって私はいつかは消えてなくなる。明日かもしれない。今すぐにだって。今キセキを見ておかないと

私、私はどこに行くの？

竜 いや。本当に終わったのかな？って。

藍 だから最後の手段と昇子は言った。

まゆみ 終わったのよ。

昇子 まこっちゃん、ぎゅうってして。藍ちゃん、ちゃんと見ていてね。

真 何言ってるの？

まゆみ ほらもうビルとビルの間には誰もいないじゃない。

藍 昇子は願いつける。

昇子 お願い。

竜 みんな帰って行ったけど、一番始めにこのチケツトを買ったあの子。

藍 真は拒み続ける。

真 潰れるよ。

竜 カメラちゃんはまだ話し続けてるんだろうか？

藍 どうせいつか別の昇子になってしまうなら。

昇子 潰れたっていい。

竜 俺、やっぱり戻るよ。

藍 だって真が潰してくれたら4番目にも5番目にもならない。

昇子 ただ消えるだけ。

まゆみ 竜が気にするのも分かるけど。

藍 もう何も潰したくないんだ。

真 昇子を潰したくない。

竜 けど、もしまだ話し続けているなら、俺が、井上
竜が終わらせなきゃ。

藍 もうカイブツにはなりたくない。

竜 このまま帰ったら俺、自分が誰だか分からなくな
る。

藍 私のままでいたいよ。

竜 記憶少年の井上竜じゃなくなったけど、始めた俺
が終わらせなきゃいけない。

藍 私は、何が見たいんだろ？

竜 ありがとう、まゆみ。眼球、角膜、前眼房、って
こんな時に目が見れないなんてちよつとつらいね。

まゆみ 竜……、よし、行ってこい。

そして、竜の背中を押した。

藍はまだ再生を止めない。

藍 本当のキセキが起こったのは、期限が切れるその
瞬間。

頭蓋骨の裏側を睨み付けるように見つめ続けた。
アスファルトにビルとビルの影が見えてきた。

日向と日陰が生まれたから、さっきまで泣いて

いた昇子は「あたたかい」と言った。

竜が走り込んでくる。

竜 やっぱりまだ終わってないみたいだな。

藍 それから顔を上げて、

竜 もう終わりにしよう。

藍 誰？

竜 ビッグウェーブデイはもう終わったんだよ。

藍 終わってない。ちゃんと見えてるもの。息づいて

いる。表情、動き、気持ち。ちゃんと私たちはここに

いたの。私が話し続けることは、ここにいたっていう

証拠なの。

竜 証拠…

藍 ほら、見えない？

見えるはずがないのに竜はおもわず空中をみつ

めた。

昇子 ねえ、あったかい。それに目隠ししても分かる

くらいすごく明るい。これ、波だよ。七色に光るキセ

キの波。

藍 違うの。それは波じゃない。

真 これは毎朝、いつものことだよ。

昇子 きつとキラキラしてきれいなんだろうな。

藍 目隠しに手をかけた。止めて、真、早く止めて。

目隠しを取らせないで。

真 無理だよ。触れない。

昇子 まこっちゃん、キセキの波だよ。ぎゅうつてして

も大丈夫。早く。

藍 早く止めて。

真 だめだよ。今触ったら、本当に潰してしまう。だつて、

昇子 これが、七色の波。

昇子は目隠しをはずした。

藍 それはただの朝日。

昇子 まぶしくてよく見えない。早く、まこっちゃん早

くキセキに触れて。キセキを起こして。今なら…あ。

藍 この瞬間を私は何度も再生した。

昇子 これは朝日。キセキは来ない。朝一番。本当の名

前。藍ちゃん。真。潰す。ネコ。ポラロイド。

藍 だけどいくら再生してもやっぱり止めることが出来なくて。

真 藍、昇子がどんどん忘れていく。僕のこと、藍のことも、本当の名前を呼んでくれたことも。

昇子 カイブツ。ビルとビルの間。写真。キセキの波。神様の仕事。

藍 何にも出来ない。私はやっぱりただのカメラなの？だって真が考えてることも分からなかった。

真 止まらない。キセキが起こらないと、昇子じゃなくなる。潰さないように、潰さないように。力の加減、力が入らないように、抱きしめられたら。

昇子 いきなり子供あつかいするな。この目隠し。私の証拠。

真 もし僕が潰さなかったら昇子にとってキセキになるんだよね。

藍 そうよ。

昇子 腕立て。罰ゲーム。ビッグウェーブ同盟。

ぐったりと昇子は横たわる。

藍 だけど悲鳴は聞こえなかった。まぶしい朝の光。

ビルとビルの間から本当に七色に光っていた。流れ込む波のように私を真を昇子をやさしく包んで。いつもと同じ朝日なのに、私はキセキを見た。それから、キセキの向こう側も。

真 間に合ったのかな？昇子に伝わったのかな？

藍 うん、きっと。だって潰れてないよ。気を失ってるだけ。

真 潰さないって言ったろ？

藍 本当にキセキが起こったのね。私、絶対に忘れない。真、これからはいくらでもぎゅうって…

真 これから？

藍 まこっちゃん？おなか…

真 力が入らないようになればいいって思ってた。でもこれしか思いつかなくて。痛かっただろうな、今まで潰してきたもの。

藍 グシャ…潰れたのはまこっちゃんの方？

真 やっぱり、どうやって抱きしめたらいいか分からなくて。

藍 だけどどうして。

真 カイブツって呼ばなかった。最後まで。藍、これ。

藍 写真？昇子ちゃんの。

真 もし、4番目になってたら3番目の昇子をちゃんと埋めてあげなきゃ。アスファルトの上じゃ冷たい。

藍 どこ行くの？

真 帰る。

藍 どこに？

真 ごめん。また嫌なもの見せたかも。

藍 ううん、キセキだよ。もうカイブツじゃない。

真 じゃ、見たいもの見れた？

藍 うん。精巧なカメラになんかもうならない。

真 再生なんかしなくたって、忘れないよね？

藍 真？

真 見たいもの見ればいいんだから。

藍 大丈夫？

真 そしたらずっと忘れないよね？昇子は僕のこと忘れたとしても、藍はずっと、

藍 真、待って。

真 七色だよ。七色に光るキセキの波だ。

藍 真！

「急患はいりました」

「路上で発見」

「時間は午前10時15分」

「意識レベルは？…」

「腹部が握り潰されています。」

昇子が立ち上がってフラフラ歩き出す。

藍には目もくれず。

藍 あ、あ…ちよつと待って昇子ちゃん。伝わらなかったの？まこっちゃんのキセキ。消えちゃったの？待って、行かないで昇子ちゃん。

そして昇子は人波に飲まれていった。

藍の頭蓋骨の裏側の映像は止まる。

竜 現実はこちらだよ。そこには誰もいないんだから。

藍 だって教えてあげればよかった。一回でも私が抱きしめてあげてたら、教えてあげてたらまこっちゃんも昇子ちゃんもいなくならなかった。

竜 もう終わったんだよ。ビッグウェーブデイは。

藍 終わった…？

竜 いくら再生しても、それは本物じゃないって言っ

てたじゃないか。

藍 そんなこと分かってるわよ。本当はずっと分かってた。私はただ名前を呼んでくれた二人のを見ていたかっただけ。他に見たいものなんてないから。だけど写真だけしか残ってない。それも土に返さなきゃならなくなつて。(土に埋めながら) 再生したって本物じゃないから、悲しいだけ。だけどまた逢えるなら頭の中でも何でもいい。いくらでも再生するんだから。

竜 でも、目を開けていなかったら、もしすれ違ったとしても気が付かないよ。

藍 竜

竜 本当にもう一回逢いたいなら、今を見なきゃ。

藍 今を？

藍、ゆっくり目を開ける、車の音、人の声、クラクション、日常のざわめき。

藍 今を見たなら。もしかしたらすれ違うことがあるかも…？

竜 その可能性を見過ごしたら悔しいじゃない？

藍 あなた…？

竜 井上竜。君と逢うの3回目だよ。

藍 ごめんなさい。私、覚えてない。

竜 そうか。初めて会った時も再生してたから。

藍 だけど名前は知ってる。ビッグウェーブデイ…

竜 それは、俺とは別人だよ。俺はただのサラリーマン。

ぐったりと昇子は横たわる。

藍 だけど悲鳴は聞こえなかった。まぶしい朝の光。

ビルとビルの間から本当に七色に光っていた。流れ込む波のように私を真を昇子をやさしく包んで。いつもと同じ朝日なのに、私はキセキを見た。それから、キセキの向こう側も。

真 間に合ったのかな？昇子に伝わったのかな？

藍 うん、きっと。だって潰れてないよ。気を失ってるだけ。

真 潰さないって言ったろ？

藍 本当にキセキが起こったのね。私、絶対に忘れない。真、これからはいくらでもぎゅうって…

真 これから？

藍 まこっちゃん？おなか…

真 力が入らないようになればいいって思ってた。でもこれしか思いつかなくて。痛かっただろうな、今まで

潰してきたもの。

藍　グシャ……潰れたのはまこっちゃんの方？

真　やっぱり、どうやって抱きしめたらいいか分からなくて。

藍　けどどうして。

真　カイツツって呼ばなかった。最後まで。藍、これ。

藍　ただのサラリーマンがどうして私のこと。

竜　えーっと、縁だよ。きっと、これも何かの縁。

藍、まわりを見渡して。

藍　今を見たら、私は一人。

竜　大丈夫？家まで送ろうか。

藍　大丈夫。一人で大丈夫。まこっちゃんが言ってた。再生なんかしなくても忘れないよねって。私、本当に精巧なカメラになるところだった。

竜　あの。

藍　私、帰ります。

竜　あのさ、このチケット買わなきゃよかったって思ってる？

藍　どうして？

竜 だって、こんなことになったし。

藍 だけどあの二人に逢えた。偶然、とても偶然に。キセキを見る為に。

竜 キセキ？

藍 もしかしたらすれ違うかもしれない。その時のこと考えてみる。大丈夫、こんなにたぐさんのビルとビルの間の中で出逢えたんだから。いつかは。さよなら。

竜 こんなにたぐさんのビルとビルの間で、偶然に…？ねえ、もしかしたらそれが本当の…ちよつと。

藍 藍。私の名前、「あい」っていうんです。

藍、去る。

竜 「キセキは日常の中に」確かこんな格言あったよな？誰が言ってたんだっけ？はあ…：やつと本当に終わりだな。あれ？そういえば目を見たのに癖が出なかった。何でだろう。何でもない俺になったからか？違うか。もともと何でもなかったんだ。ただの井上竜、それで十分か。ビッグウェーブデイチケット。もういいらないよ、こんなもの。

と、ポケットに入っているチケットをばらまく。

いつもと同じ朝の街、ビルとビルの間をいつも
のように人々が通り過ぎる。

その中に昇子、松本、あの高校生達の姿も見える。

昇子 ビリビリ、私のビリビリ。呼んでる。聞こえてくる。

竜 もうビッグウェーブデイは終わりだ。

耳年増 副会長、情報、情報、New情報。

サーファー またクチコミ雑誌？

野次馬 情けねえー、流行に流される部下どもめ。

竜 俺は何でもない井上竜。

竜、言いながら持っているだけのチケットをど
んどんばらまく。

サーファー あれ。何かしらこれ？

野次馬 ビッグウェーブデイチケット？

昇子 ここから？

耳年増 おお。これまたNew情報。2丁目の幽霊屋敷ッ
アー。

野次馬 どれどれどれ？

サーファー 会長？

野次馬 いや、俺は興味ないよ。

竜 あの子に言った言葉。

松本 どこ行ったのよ。夜通し歩き通しよ。

竜 あれは俺自身に言った言葉だ。

サーファー 会長、遅刻するわよ。

竜 今を見る。

昇子、とうとうビリビリを見つけた。土まみれ

の手には一枚の写真。

昇子 見つけた。これは私？いつのことだろう。昨日のこと

？もっと昔のこと？なんでだろう。なんでこんなに

悲しいんだろう？なんでこんなに嬉しいんだろう？は

っきり思い出せないけど体中に伝わってくる。ビリビリ

ビリビリ。松本さん、見つけたよ。このビリビリの正体。

私の奥底に流れてくるあの瞬間。私、私、何番目でも

ない、何の区別もしない昇子。私の名前を呼んでくれた……

人々が行き交う。

そこに藍と真の姿を見た、ような気がした。

人々、それぞれの方向へ去っていく。

昇子 あ…。

と、振り返るが追いかけはしない。

ただ、微笑んだ。何故だか分からないけれど、

昇子は確かに微笑んだ。

そしてビルとビルの間を歩いて行く。

何も無いビルとビルの間。

ビッグウェーブチケットだけが波を造り続ける

おわり